

～共生社会のためのボーダーをこえる人づくり～



目次

はじめに	1
1. KFC による共生社会モデル構築事業のあゆみ	4
2. 2024 年度「ことばを紡ぐプロジェクト」	9
2-1 インターンシップ事業	9
(1)採用まで	
(2)インターンの経験を通して私が思うこと	
2-2 行政との定期的連携	16
2-3 合宿	18
(1)合宿事業にかけた願い・不安	
(2)第 1 回合宿「出会う」	
(3)第 2 回合宿「学ぶ」	
(4)第 3 回合宿「深める」	
(5)第 4 回合宿「まとめる」	
(6)成果報告会	
2-4 「ことばを紡ぎつなげる『多文化共生』フォーラム～手繰り寄せてつくる相互理解～」	40
(1)フォーラムまでの道のり	
(2)フォーラム内容	
(3)当日の感想・反省	
2-5 合宿およびフォーラムを終えて	64
(1)全体の振り返りと今後の展望：共生スポークスパーソン	
(2)ことばを紡ぐということ：コーディネーター	
(3)「ことばを紡ぐプロジェクト」まとめに代えて：講師の方々より	
3. 事業を終えて	91
番外編：ウトロフィールドワークの報告	98
付録	99
(1)2023 年度「響き合う『多文化共生』フォーラム」	
(2)2023 年度提言書「響き合う『多文化共生社会』に向けての提言」	

表紙・裏表紙の写真は、「ことばを紡ぎつなげる「多文化共生」フォーラム」で実施したワードクラウド作品です。表はフォーラム後、裏はフォーラム前に行ったものです。詳しくは本文「2-4(2)フォーラム内容⑤ワードクラウド」をご覧ください。

ことばを紡ぐプロジェクト
～共生社会のためのボーダーをこえる人づくり～
報告書

はじめに

外国人と日本人が日本社会で「共生」する上での課題は何かと問われた時、人はその関わり方や、置かれた立場、思想や信念によってさまざまな答えを発する。

外国人が日本で暮らすことを拒絶するという極端な考え方や国籍など意味をなさない国境なき社会を実現したいという考え方を除けば、あえて美しくもなく耳障りもよくない言葉を使えば日本に住む外国人と日本人が「どう折り合いをつけて暮らす」ことが望ましいのかは、とても現在のイシューである。

だが、そのイシューについて考える上での前提がアップデートされているかというところはなっていない。

外国人と日本人が一つの家族のなかでパートナーとして暮らしている、また親子で国籍の異なる家族もいるなかで、そもそも日本人と外国人の境界は、置かれている環境や関係性によって千差万別であり、多様な生活実態が前提の日本社会で外国人と日本人の共生についての課題を語ることは、元来難しい。

ただ、さまざまな外国人・外国ルーツの人々の課題にかかわってきた者として、外国人と日本人が日本社会で共生する社会をつくる上での課題として確実に言えることは、

「『外国人』にかかわるあまりにも多くのことを、『日本人』だけで決めている」ということである。

上記のなかであえて外国人にも日本人にも「」をつけたのは、そもそも「外国人」とは誰のことを指すのか、「日本人」とは誰かということについて巷に流布する理解、規定は、非常に感覚的で曖昧である。

だがある種の強固さで日本人と外国人を分ける慣習は存在し、そこから生起される境界や規定は、日本で暮らす「日本人」とされる人々、「外国人」とされる人々の思考や行動に大きく影響している。

現在、社会、特に行政機関や関係機関に広く流通している 2006 年に総務省が主導し設置した「多文化共生の推進に関する研究会」が定義した地域における多文化共生、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしなが

ら、地域社会の構成員としてともに生きていくこと」は、はたして地域での共生のためにどれほど「日本人」とされる人々、「外国人」とされる人々の思考や行動に影響を与えられるのかを考えた時、前提においていくつかの問題がみえる。

福岡大学の岡本雅亨は、日本社会の外国人・外国ルーツの人と日本人の共生、多様性の認知や文化的少数者との共生を考えるならば、先住民(アイヌ)や旧植民地出身者(在日コリアンら)のことを無視した総務省主導の「多文化共生」はそもそもありえない定義であり、本当の共生の実現は難しいと語っている。

確かに「多文化共生の推進に関する研究会」が出した報告書には、先住民(アイヌ)に関する考察、記述はなく、日本の植民地支配の結果、元は帝国臣民(日本人)として日本に移住、日本政府に外国人とされ在住するようになった在日コリアンのこともほとんど触れられていない。

そもそも研究会構成員 12 人のなかで外国人・外国ルーツを持つ構成員は、中国出身の女性と日系ブラジル人研究者だけであり、アイヌや在日コリアンの構成員はいない。ほかの構成員 10 名は、全て日本人となっている。

研究会の姿勢としては、研究会構成員からも先住民や旧植民地出身者(在日コリアンら)をとり挙げる姿勢はみられない。

東京大学の高谷幸は、研究会構成員の一人である田村太郎が「今回は日本語でコミュニケーションできない人たちを対象を限定しようということになり、在日コリアンや先住民、オーバーステイの問題は対象から外れました」(『多文化共生の実験室 大阪から考える』(2022))と語ったことを引用している。

なぜ総務省が、「多文化共生」という言葉から先住民や旧植民地出身者の課題を外したのかは、言葉の壁に困惑する地方自治体のニーズに応えた提言づくりを優先したというロジックも語られている。しかしその後、大きな「多文化共生」定義の変更がないので本意は推察するしかないが、事実として総務省主導の「多文化共生」からは、歴史(先住民と旧植民地)のウォッシングがなされたとみるのも妥当である。

過去 30 年間の外国人と日本人の共生に関する議論が、主として行政機関においては総務省主導の「多文化共生」という言葉に収斂されていく状況において、笹川平和財団(SPF)から 2022 年より新たに 5 ヶ年事業として始まる「新人流時代の共生社会モデル構築」事業として、神戸での取り組みを踏まえた提案はありますかという話をもらったのを契機に今期まで 3 年間の事業を進めてきた。

課題としてあげた『『外国人』にかかわるあまりにも多くのことを、『日本人』だけで決めている』ことが前提の日本社会では、本質的に問題の多い「多文化共生」でさえ機能しているのか。平たく言えば、現在行政機関などによって用意されている「多文化共生」事

業は外国人に認知されているか、また利用・活用されているのかという問題意識をもち事業を始めた。

(金宣吉)



第3回合宿 書道ワークで描いた絵(そんぎる作)

1. KFC による共生社会モデル構築事業のあゆみ

通常の営利事業等では、ユーザーの意向を踏まえたマーケティング調査などを適宜実施するのに「多文化共生」施策・事業については、その施策・事業が外国人住民・外国ルーツの人々に知られているかさえ明らかにされていない。KFC は、まずはそこを明らかにしたいと考えたプロジェクト(「行政・国際交流協会による『多文化共生』地域サービスに係る実態調査」)を提案し 2022 年度に実施した。

留学生、在日コリアン、移住家庭で育ったユース、中国残留邦人帰国者、技能実習生、国際結婚移住者、六つのカテゴリーの外国人・外国ルーツ住民の人たちへのフォーカスグループ調査は、結果として行政・国際交流協会など「多文化共生」事業プロバイダーと、本来事業対象の中核となる外国人・外国ルーツ住民との間の非対称性を色濃く認識させるものであった。

あらかじめ、現在の「多文化共生」対象からは外されている在日コリアンや中国残留邦人帰国者以外でも外国人・外国ルーツ住民は、行政・国際交流協会などの進める「多文化共生」施策・事業をほぼ知らなかった。ただ、照会したその取り組みを好意的には受け止めていた。その結果内容は、KFC ホームページから報告書がダウンロードできるので読んでもらえたらと思う。

「多文化共生」施策・事業をめぐる非対称性が生じる背景には、情報や認識、歴史や背景の違いが生み出す知識や意識の溝を埋められない状況がある。その溝を埋めるためには、当事者性を持った活動(セルフサポート)とその活動を担う人(セルフサポーター)の存在が欠かせないという考えを KFC 自身が阪神・淡路大震災後の発足時から現在まで強く意識してきたことである。1 年目の調査結果は、KFC が考えてきた問題意識を克服できていない「多文化共生」の課題を明示したものであった。

事業 2 年目の 2023 年度は、『多文化共生』施策を高めるための遂行組織と外国ルーツ市民当事者の『響きあう』場の醸成プロジェクト」を起案し取り組んだ。

2023 年度事業としての柱として、大きくはさまざまなジャンル(研究、法曹、映画、音楽、教育など)の第一線で活躍している外国ルーツの先駆者(フロントランナー)らにその活動と活動の源泉をインタビューし記事とし発信すること、その活躍を社会により広めることで、「多文化共生」をめぐる非対称性を多くの人が認識し、溝を埋める知見を得られるように取り組んだ。インタビュー記事は、KFC の情報ポータルサイト(ばいゆー)から読めるのでご一読いただきたい。

もう一つの事業の柱として、セルフサポート、セルフサポーターに関心を寄せる人々、

「多文化共生」施策・事業を進める機関・組織の人たち、前年度の調査事業に協力者として参加してもらえた人たちがグループトークのリソースパーソンとして集い、肩書にとらわれずに対話し理解を深めるフォーラム(響き合う「多文化共生」フォーラム)を開催した。

フォーラムには、国際交流協会勤務、在日コリアン多住地域の社会福祉法人勤務などを経て現在大学教員であり在日韓国人教会の牧師として活動している金迅野氏に「共生の場の実現にむけて」というタイトルで基調講演をしてもらい、その後に全国でも屈指の共生に向けての国際的事業に取り組む(公財)とよなか国際交流協会から山野上隆史氏、山根絵美氏、三木幸美氏より当事者の力を活かした組織活動について、「響き合う『多文化共生』の実現にむけて』というタイトルで話題提供をお願いした。

基調講演、話題提供後のグループトークには、前年度調査のインタビューイーにも加わってもらった形で共生についての認識を深めるグループトークとグループごとの発表をしてもらった。

普段、研修などでは講義を受ける受け身形が多い「多文化共生」理解について、異なる立場、出自の人々が、「響き合う『多文化共生』」を求めて対話をする機会は貴重な機会となった。フォーラム内容は、本書付録として採録しているのでご一読いただきたい。

フロンランナーのインタビューを通じて、困難な状況のなかでも活躍している外国人・外国ルーツの人の力強さを発信することができたことは大きな成果であったが、一方でフロンランナーの人々が力を発揮していく過程と周辺のサポートは、とても当事者の強い意志と努力、偶発的で非常に幸運な出会いが機会になっていることも多く、外国人・外国ルーツの若者をシステムとして支える仕組みがないこともわかった。

故にフロンランナーとルーツコミュニティ、ほかの在住外国人コミュニティとの接点も持ちにくく、ロールモデルとしての役割が果たしにくい状況でもあった。共生を支える当事者の育成をシステムとして構築する仕組みが求められていると感じた。

2023年度の最後には、1年目調査、2年目のフロンランナーインタビューとフォーラムから得た知見をもとに「響き合う『多文化共生社会』」に向けての提言(巻末採録)」を作成し、兵庫県、神戸市、各教育委員会、(公財)兵庫県国際交流協会、(公財)神戸国際コミュニティセンターなど「多文化共生」についての施策を所管する機関に提言した。

その提言内容についての意見交換の場を神戸市、(公財)神戸国際コミュニティセンターとは、現在まで定期的に実施している。

そして2024年度、3年目事業は、私個人としてはもし「共生」をテーマとして事業を起案できるのであれば困難かもしれないが、当初から挑戦したいと考えていた若者を対象とした事業を起案することになった。

この事業は、過去 2 年間の企画準備とは異なり、正確には事業 2 年目の終盤から共に共生モデル構築事業を担当した KFC の櫻木晴日と共に起案した。

櫻木は当初から、現在の若者たちは語り合う機会が少なく、互いをつなぐ「ことば」をもちにくい状況にあり、「共生社会を創ることばをつくり、まとめ、発信する」ことに取り組みたいと話した。その思いは「ことばを紡ぐ」という言葉に進化する。

2024 年度事業は、「共生社会を創ることばを紡ぐプロジェクト～共生社会のためのボーダーをこえる人づくり～」とし、2023 年度に開催した「響き合う『多文化共生』フォーラム」をより深めたフォーラム・「(共生社会の実現を願う)若者の声を自らが発見し、生きづらさを抱える人々と共通する言葉をまとめて発信し、さらに仲間をつくるための場をつくる」の開催を課題として提示し、主催者と共に複数回の合宿での学びを通して自らが企画しフォーラム運営をする若者メンバーを募ることを事業の大きな柱とした。メンバーには、外国ルーツを持つ者と「日本人」の若者に入ってもらうことを想定し、募集段階からその旨も明記した形をとった。

併せて準備過程から運営する側の核として係る外国ルーツを持つ若いインターンを採用し、若いマイノリティ当事者が、主体性を(共生)事業に反映したマネジメントをすることの経験と、そのことがもたらす広がりも言葉を紡ぐ事業の柱とした。

メンバー募集は、KFC の広報媒体、インターン所属大学の広報室、つながりのある研究者、NGO 関係者に趣旨を明記した募集案内を広報し、募集方法や現在の学生や若者の気質や合宿での学びやアクティビティについての意見交換の場をオンラインなどで持ち、参加を募った。

事業を進める上で最も危惧したメンバーへの応募が得られないのではないかとすることは、研究者の協力、特に立命館大学のキムヴァオトカジャッキー教授の卒業生も含めた案内などもあって 10 名の応募枠を超える申し込みが得られた。

応募シートの内容を見て、自分の大学院生活での研究目的で参加したいなど開催側の趣旨を理解できずに応募してきた若者らを除いた 10 名に参加してもらうことにした。10 名のなかで個人の仕事との関係で一度も参加できない人が 1 名、何度かコンタクトをとることはできたが結局合宿に参加できなかった人が 1 名、当初合宿に参加したが学業を優先したいと途中でリタイヤした人が 1 名、最終のフォーラム準備期間中に意欲が自分は皆と違うと辞退した人が 1 名となった。しかし、企画段階からこのプロジェクトに是非参加してほしいと関係者から推薦のあった青年が、合宿の発題者として参加したことを契機にメンバーに加わり、最後のフォーラム準備合宿メンバーは 7 名となった。

合宿の内容は事業コーディネーターの櫻木晴日とインターンの曽根メラティに記述を任せたいが、当初から「生きづらさ」、「話しづらさ」の蔓延する日本社会で安心して出会え

る、話せるプログラムを丁寧につくっていったことは、まさに一つ一つの綿を紡ぎ、皆で糸をつくり、その糸で布を編み上げるような思いの共有であったように感じている。

「生きづらさ」、「話しづらさ」の蔓延するなかで息苦しさを多くの人が感じ、ともすれば他者と距離を近づけること、他者を理解すること、他者と手を携えることのために費やす時間は、効率や競争にとって無駄なこととなり、分断やヘイトといった安易な渦に飲み込まれる主因ともなりえる。また「生きづらさ」、「話しづらさ」を出すことはコミュニケーション能力の欠如や「弱さ」とされ、人前でそのことを出すことさえ難しい状況もある。

「ことばを紡ぐプロジェクト」は、現代社会で触れにくい「生きづらさ」、「話しづらさ」を避けることなく、教条的な「共生」、安易な「親しみやすさ」や「多文化理解」とは異なる対話と創造へのあゆみを具現化していった。逆に「生きづらさ」、「話しづらさ」に向き合い、それらを個人に押しつける社会構造を共有し、ウォッシングされがちなマイノリティへの差別と抵抗の歴史から「共生」への課題を学ぶことが実は多様な人々と繋がることになるという道筋に気付く場であった。

4回の合宿、「出会う」、「学ぶ」、「深める」、「まとめる」には実践家、研究者、行政機関の管理職、また民族音楽演奏者、画家といったアーティストにも講師、指導者として来てもらい、学び感じることを深めながらフォーラムの準備を進めることになった。

2025年1月18日、奇しくも阪神・淡路大震災から30年を迎えた次の日に、インターンとプロジェクト参加メンバー、そしてKFCの事業コーディネーターの若者たちが中心となって準備したフォーラム・「ことばを紡ぎ繋がる『多文化共生』フォーラム～手繰り寄せてつくる相互理解～」を開催することができた。

30年前の阪神・淡路大震災のボランティア活動を源流とするKFC(神戸定住外国人支援センター)が、地域で異なる国籍、歴史的背景、文化的バックボーンを持つ人々が共生できる社会をつくるために、外国人・外国ルーツの人の社会資源をつくりたいという思いを次世代が受け止めてくれたように思うフォーラムであった。

当初、誰も合宿に応募してくれなかったらと危惧したことを思い返すと、フォーラム開催までできたことをまずは、協力いただいた関係者各位に感謝したい。

若者たちは、フォーラムの開催だけでなく、「共生スポークパーソン」という自分たちを表す言葉も紡いでくれた。たくさんの人々に支えられた「ことばを紡ぐプロジェクト」であることは重々承知しているが、共生スポークパーソンの皆にまずは感謝し、報告書の巻頭文にさせていただきたい。

(金宣吉)



第3回合宿 書道ワークでの絵「家来の一人もない王様」(Wakkun 作)

2. 2024 年度「ことばを紡ぐプロジェクト」

現代社会での「話しづらさ」を乗り越え、内実の伴う共生を推し進めるために、「ことばを紡ぐプロジェクト」は4つの柱で行った。一つは、地域・行政・仲間を橋渡しするセルフサポーター育成としてのインターンシップ事業である。地域で住民と関わり、事業を担いながら課題を行政に伝えられる人材育成を目指した。二つめは、「多文化共生」施策を進める行政機関との定期的連携である。前年度の提言を実効性のあるものとするため、課題や取り組みを共有し活動化するための話し合いを行った。三つめは合宿事業で、若者を募り計4回10日の活動を行った。最後がフォーラムである。合宿メンバーが自分たちの思いを形にするために一から話し合いを重ね実現した。

2-1 インターンシップ事業

(1) インターンシップ採用まで

今年度、「言葉を紡ぐプロジェクト」の実施にあたり、約1年間事業コーディネートを担当してもらう外国ルーツの若者のインターンを採用することが決まった。当初、NPOと行政機関両方のことを知ってもらっていることがこの事業を遂行するにはいいだろうと考え、KFCと行政関係機関両方でのインターンシップを体験してもらうことを検討していたが、予算が合わず、NPO(KFC)でのインターン活動に専念してもらうこととなった。

インターン募集内容には、「外国にルーツを持つ人々の基本的な権利が守られる社会を推進するためには、当事者の声を拾い、社会に発信する当事者(セルフサポーター)の存在が必要です。そのセルフサポーター育成に関わる事業を担当していただきます。」と記載し、①セルフサポーター育成事業のコーディネート、②そのほかセルフサポーター育成のための関連業務を担当してもらうこととした。

これまで KFC では、外国ルーツの子どもの学習支援事業等に多くの外国ルーツの青年に関わってもらっていたが、1年という長期間にわたって企画から関わってもらう機会はなかった。また、これからの日本社会を担っていく20代の若者で、「多文化共生」に関心が高く自身も外国ルーツであること、日本の外国人政策や日本社会の理解不足に課題を感じている人材を求めた。そして、下の世代を育てる意欲や素質があり、ある程度の事務作業をこなせることを条件としたので、ハードルの高さから人材の確保ができるか不安があった。

そのような条件に合うインターンを探していたところ、日本とインドネシアにルーツを

持ち、留学経験があり、日本の難民や難民受け入れ制度等について学び疑問を感じている、そして高校生の頃から外国ルーツの子どもの学習支援ボランティアとして関わっていた経験のある曾祢メラティさんが、KFC の学習支援ボランティアとして関わってくれていた。そして、曾祢メラティさんが非常に適任であると感じて、内部で相談の上依頼し、インターンを引き受けてもらえることとなった。

日本国籍でありながら、カタカナの名前やはっきりとした顔立ちから、「普通の日本人」であれば経験しないようなマイクロアグレッションを受け、嫌な思いを何度もしてきたメラティさんの経験と知識や能力、そして他者に対する思いやりは、今回の「届け！私たちの声！！ことばを紡ぐプロジェクト」のインターンコーディネーターを務めてもらうには十分すぎるぐらいだったと感じている。

メラティさんは、インターンコーディネーターとして、KFC スタッフの櫻木と共に本事業の中心となり、細やかに企画・運営を担ってくれた。出会う、学ぶ、深める、まとめるという合宿の流れや、それぞれの合宿の目標を設定し、それらを実施するために必要なことを考え、講師への依頼や宿の手配などのこまごまとした事務作業を行い、合宿では安心して話の出来る場づくりに努め、のちに共生スポークスパーソンと名乗ることになる合宿に参加してくれた青年たちとの協働作業などに丁寧に取り組んでくれた。

4 回の合宿で最後にフォーラムを開催するところまで初対面の者同士でできるだろうかと、私自身は運営法人スタッフとして少し不安もあった。メラティさんも参加者も不安と大変な負担があったと思われる。しかし、青年たちに多くの経験に基づく示唆や知識を提供してくれた講師の方々の支えもあって、合宿を重ねるにつれてそれぞれの考えが深まり、また徐々に絆が深まっていく様子が見られた。成果報告会や最後のフォーラムでは、青年たちの力強い言葉を頼もしく思ったり、逆に勇気づけられたりする参加者がほとんどで、「言葉を紡ぐプロジェクト」は大成功に終わった。

こうした結果も、彼女に出会えてなかったら残せなかったことだろうと本事業に関わった KFC スタッフの皆が感じている。この出会いに感謝するとともに、今後、メラティさんを初め、共生スポークスパーソンの皆にとってもこの経験が活かされ、またこれからも居場所の一つとなるなどなんらかのつながりが続くことを事業運営者の一人として願っている。

(志岐 良子)

(2) インターンの経験を通して私が思うこと

① インターンとして活動するまでの経緯

私は 2023 年の冬から、外国にルーツを持つ子どもたちの学習支援ボランティアとして KFC で活動させていただいている。出自や国籍などのルーツによって、子どもたちが受ける教育や持つ夢に制限があっては決してならないという思いのもと、外国にルーツを持つ小中学生の日本語学習や教科学習のサポートをしていた。ちょうど留学から帰ってきたばかりで、その後の 1 年の休学期間をどのように過ごそうかと考えていたところ、SPF 新人流時代の共生社会モデル構築事業 3 年目となる「共生社会を創ることばを紡ぐプロジェクト～共生社会のためのボーダーをこえる人づくり～」に 1 年間のインターン兼プロジェクトメンバーとして活動しないかと KFC からお声がけいただき、プロジェクトに関わることになった。

私がインターンとして活動する決断をした理由は主に 2 つある。1 つ目は、個人が変えることのできないアイデンティティをターゲットにした差別や排除が多く存在する不公正な日本社会に抱いてきた問題意識だ。誰もが一度は、テレビのニュースやネットの記事で、日本社会の問題責任を「外国人」に押しつける場面を見たことがあるのではないだろうか。コロナ禍では「～人お断り」と貼り紙をする店があったり、外国籍を持つ人々が犯した罪を報道する際は、同程度の罪を犯した日本国籍保持者とは違い、不法性や個人の異質性(「外国人」であるということ)を過度に強調する傾向があったりもする。日本と外国にルーツを持つ者として日本で生まれ育った私も、名前がカタカナで表記されることや見た目の違いを理由に、ハーフであることをネタにして面白がられた経験や、ある手続きの際に「日本国籍を持っている」と言っても信じてもらえないという場면을体験したこともある。日本社会にはたくさんの外国にルーツを持つ住民がいるが、その人々が日本社会の「外」の人として認識され、さまざまな社会システムから排除されている現状を変える一歩を踏み出したいと思い、プロジェクトに関わりたと思った。

2 つ目の理由は、外国にルーツを持つマイノリティとして、1 年間のイギリス留学中に感じた居心地のよさと日本社会における生きづらさの間にある違いに関心を持っていたからだ。もちろん、イギリスにもまだまだマイノリティ問題の課題はあるのだが、留学中、少なくとも日本よりは、外国にルーツを持つことも含め、自分のアイデンティティが受け入れられているように感じた。現地では、日本出身だからといって、日本語で適当に話してみてもという無茶振りもされず、ハーフだからといって、初対面の人に家族事情を深掘りされることもなかった。そんな日常で感じた小さなエピソードの積み重ねが、「私らしく過ごせること」への居心地のよさにつながったのだと考える。この経験を通して、日本でマ

イノリティが社会の一員として気持ちよく暮らすために足りていないものについて、プロジェクトを通して考えたいと思った。また、自分と同じように日本社会に生きづらさを感じる同世代の外国にルーツを持つ人々や、このトピックに強い関心のある若者と共に語り合いたいと思い、インターンとメンバー参加のお話を引き受けた。

②インターン業務の内容・業務を通して得た学び

a. プロジェクトの企画

インターンの業務は KFC スタッフでプロジェクトのコーディネーターである櫻木さんと共に行った。業務開始後、はじめに経験したのは、5月に実施したプロジェクトの説明・意見交流会であった。「多文化共生」分野を専門とする研究者や、共生社会の実現に向けて現場で活動されている方々にご協力いただき、プロジェクトの企画を進めるためのご助言をいただいた。ミーティングはオンライン実施ではあったものの、十数名の先生方の前でプロジェクトの説明や質問をさせていただくのに大変緊張したのを今でも鮮明に覚えている。しかし、合宿・フォーラム事業におけるリスクマネジメントや英語版のプログラム応募フォームの作成、事業記録の残し方等、さまざまなアドバイスをいただき、その前よりもはっきりとしたプログラムの実施イメージを形成することができた。年度始まりでお忙しい中、ご協力いただいた参加者の方々には大変感謝している。

次に意見交流会でご教示いただいたことをもとに合宿事業の詳細を決定し、参加者募集チラシの作成を行なった。インターン開始前から既に作成されていた実施計画書の内容をもとに、「出会う」、「学ぶ」、「深める」、「まとめる」をテーマにした計4回の合宿と、参加メンバーによるフォーラムの企画・運営を主軸とし、今日の日本社会に漠然と生きづらさや違和感を持つ、18歳以上の外国にルーツを持つ若者と共生を願う日本在住の若者に募集をかけた。『多文化共生』について議論する」というと、なんだか難しそうというイメージもあると思い、チラシは明るいデザインにすることを心がけて作成した。参加希望者には志望動機やプロジェクトに期待すること等、数個の小作文を提出いただき、KFCのスタッフと共にメンバーの選抜を行なった。当初はどれだけの参加希望者が集まるか不安であったが、日本社会の現状に対する問題意識と共生社会の実現に熱い思いを持った同世代が定員であった10名集まったのは大変嬉しかった。

b. 合宿事業

参加メンバーの募集と同時期に、第1回合宿の準備も開始した。モデル事業ということもあり、前例や正解がないなかでのプロジェクトの企画は、インターンを引き受けた時に想像していた何倍も大変であった。合宿の企画をする際は、実施計画書に記載のあったプロジェクトの趣旨を何度も読み返し、それをぶらさぬよう各ワークを組み込んだ。第1回

合宿のテーマは「出会う」であったため、参加メンバーが自分自身、そしてお互いについて理解を深めるためのワークを中心に取り入れた。合宿当日、はじめは皆、緊張気味であったが、アイスブレイクやバーベキュー、そしてコリアンパーカッションなどのワークを共に行うことで段々と打ち解けていく様子を見ることができ、とてもほっとした。第1回合宿では、武庫川女子大学の加藤丈太郎先生に和やかで楽しい雰囲気づくりにご協力いただき、大変感謝している。また、この合宿では、プロジェクトでメンバーが心地よく対話するためのルールづくりを全員で行なったことも印象深く、守られた場としての「ことばを紡ぐプロジェクト」を形づくるための土台になったのではないと思う。

「学ぶ」がテーマであった第2回合宿では、研究者やさまざまなフィールドで外国にルーツを持つ当事者に関わる活動を行っている方々にお越しいただき、「外国人」問題が構造的に形成されてきた背景や現場の活動を通して感じることにについてお話を伺った。第1回合宿から2ヵ月ぶりの再会であったが、「外国人」差別・排除の歴史や身近に存在する「多文化共生」問題について深くまで議論することができた。どのワークも、時間さえあればどこまでも深く語り合えるくらいに熱い対話を聞くことができ、合宿が終わった頃にはびっしりのメモが積み重なっていたのを覚えている。第2回合宿では、対話を通してそれぞれのメンバーの問題意識を明確化し、第3回合宿から始まるフォーラム企画準備の一步を踏み出すことができた。

第3回・第4回合宿は墨絵のワークショップや行政職員の方との対話、メンバーと同じように外国にルーツを持ちそれぞれのフィールドで共生に向けて活動されている方々とのフォーラムや、思いを実現するために企画や文字起こしをすることの意義の学習、そして成果報告会を行った。フォーラムに向けての準備が本格化するなかで、さまざまなバックグラウンドを持つ方々との対話を取り入れることができたのはとてもよかった。フォーラムの準備においては特に、参加メンバーに寄り添いながらフォーラム開催に向けてサポートを行うという任務のあるインターン業務も担いながら、メンバーの一員としても参加するという私の立場は、メンバーの率直な意見を引き出すことにより影響を与えられたのではないと思う。メンバーと同世代ということもあり、より対等な関係で接することができたこと、そしてKFCで話し合った目的を理解したうえで対話をリードできたのは、メンバーの思いや考えをより積極的に理解しようという自分自身の姿勢の形成にも繋がり、大学や日常生活では経験することのない実践的な学びを多く得させてくれた。

c. 「思い」を伝えるという役割

第4回合宿の後は、フォーラム準備のためのオンラインミーティングを20回ほど行った。限られた時間のなかで、メンバーが主体となって、白紙の状態からフォーラムを企画・運営するというのは、正直大変と感じる時も多くあった。メンバー全員、それぞれの意見

を持っており、皆で賛同できた意見はなるべく多く取り入れていきたいと思っていたものの、それをずっと続けると、会の方向性が定まらず、錯綜することもあった。また、皆離れた場所に暮らしているためしょうがないのだが、オンラインというミーティング形式には少しばかりのぎこちなさがあったように思う。しかし、学校や仕事もあるなかで、フォーラム準備に一生懸命貢献してくれたメンバーたちには本当に感謝している。個別に、意見のまとめ役であった私のタスクを手伝うと声をかけてくれたメンバーもあり、とても嬉しかった。フォーラムは終わってしまったが、今後も共生スポークスパーソンのメンバーで繋がりを続けていきたい。

プロジェクトのコーディネートのほかに、インターン業務の役割として、合宿の対話で議論した内容をもとに、当事者と行政の橋渡しも担った。この役割の目的は、行政の多文化共生施策と当事者の声のミスマッチを改善することである。共生スポークスパーソン(セルフサポーター)の代弁者として、合宿で出しあったメンバーの思いを行政職員との定期的な会議で伝え、ボーダーを乗り越えた繋がり構築に努めた。計 2 回参加した会議では、行政機関でもさまざまな「多文化共生」に関わる取り組みが実施されており、新しい取り組みも企画されていることがわかった。しかし、まだその取り組みが外国にルーツを持つ当事者に十分に周知されていないことや、「外国人」の差別や排除など、「多文化共生」問題の根本的な原因の解決に関わる取り組みはまだあまりなされていないことがわかった。私は会議で実際にどんな取り組みがあったらよいと思うか意見を求められた際、具体的にこれといった意見を述べるができなかったため、今後は普段からもっとアンテナを張り、外国にルーツを持つ住民が実際に直面する困難や生きづらさをなくすためのアクションを、個人レベルだけでなくコミュニティレベルでも考えていきたいと思う。

d. 最後に

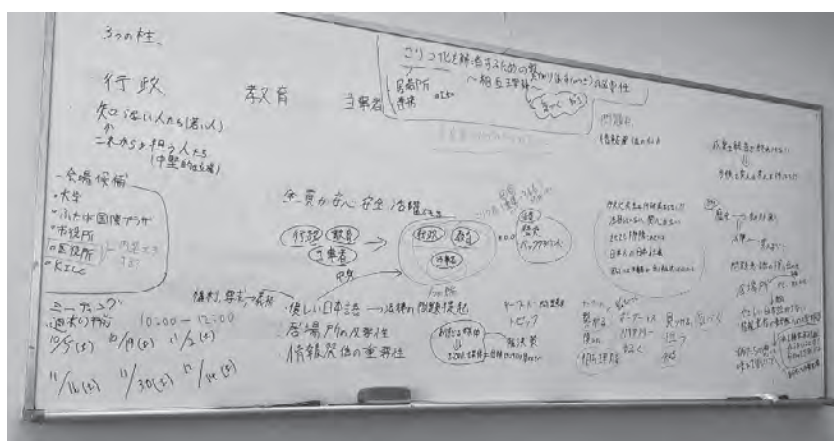
KFC の金宣吉理事長、志岐さん、そして櫻木さんには、インターンとして私を採用してくださったこと、そしてどんな考えや意見にもいつも耳を傾けてくださったことに心より感謝している。インターン開始時は、フォーマルなメールの送り方や事業のコーディネート方法の知識がほとんどなく、未だに一つ一つの業務をこなすのに時間がかかってしまうが、どんな時も優しくサポートしてくださる環境を用意してくださり、1 年間の業務を続けることができた。また、本プロジェクトでインターン経験をする機会を与えてくださった笹川平和財団の岩品様と、事業プログラムの実施に関わってくださった全ての方々にも改めて深く感謝申し上げます。今春大学を卒業し、より広い社会で人と接するなかで、社会正義の達成を目的とする活動に対する強い風当たりを経験することが多くなるかもしれない。しかし、私はことばを紡ぐプロジェクトで得た学びと活動の原動力となる勇氣、国籍やルーツなどの個人のアイデンティティを理由にした差別や排除のない明るい未来への希

望を胸に持ち続け、今後も共生社会を目指す活動に関わり続けたい。また、このプロジェクトでできた繋がりをもっと広げ、生きづらさや孤独を感じる社会的マイノリティの「居場所」となる場を増やしていきたい。

(曾祢 メラティ)



第1回合宿でのコリアンパーカッションワークショップ
さまざまなリズムと楽器を体感する



第3回合宿 フォーラムに向けた話し合いを行った際の様子
(それぞれの思いがさまざまなキーワードと共に飛び交った)

2-2 行政との定期的連携事業

昨年度(2023 年度)の共生モデル構築事業の成果である提言の中にある『『多文化共生』施策推進者が、肩書にとらわれず、共生についての疑問や業務上の悩み、考えを外国人住民当事者も含めて共有する場が必要である。同年代で共生について話す、情報を伝えあう場をつくる、行政関係者も一員となり地域に仲間をつくるなど、人と人とが出会い話す場をもつことが求められている。出会いの場の創出の結果、ほかの市民も『巻き込む』、『つながる』が可能になる。』を受けて今年度、神戸市の「多文化共生」事業担当部署である地域協働課と公益財団法人 神戸国際コミュニティセンター(KICC)の担当者と定期的な意見交換会を設けることとなった。

KFC では、これまでは KICC とは受託事業についての定期的な報告を月 1 回行っていたが業務以外の話をするのはほとんどなく、神戸市とは受託業務での関係もあまりなかったため、話をする機会すらほとんどなく、日常の業務内容や抱えている課題などをざっくりばらんに話す機会は持てていなかった。

前年度末頃から 2 機関に依頼を行い、1 回目の意見交換会は 5 月 30 日に(公財)神戸国際コミュニティセンターで行なった。まずは、自己紹介を兼ねて、参加者のこれまでの外国人や多文化との関りについてそれぞれ話をした。参加者は、これまで海外での留学経験や勤務経験、大学の専攻などなにかしら海外とのつながりを持つ人が多かった。

続いて、「(多文化)共生」について考えていることやこれまでの経験からの印象や思いなどをそれぞれに話した。

下記は、その要約である。

- ・現在、大学の社会人コースで学んでいる。国によって Happiness の基準は違うが、日本社会がどうなっていったらいいのだろうかと考えている。
- ・自分がヨーロッパで過ごした経験から、外国人住民にも「ここにいると居場所がある」と感じてもらえるようにしたい。
- ・中国で少数民族として暮らしてきており、そこでも漢族と共生し中国語で話していたので、「多文化共生」というのはこれまでも普通のことだった。
- ・日本にいるときにはハーフである自分が日本人なのか悩んだり傷つけられたりすることがあったが、イギリス留学時には受け入れられているように感じた。
- ・昔の神戸の面白さ(さまざまな移民を受け入れてきたことで、街に多文化が溢れていたこと。たとえば、「中華(華僑)」の散髪屋さんがいたなど)を次世代の神戸人に伝えることが必要ではないかということ

などが自己紹介とともに話された。

その後上述した提言に沿って、それぞれの業務で抱える悩みをざっくばらんに話し合う予定であったが、1 時間半という時間があっという間に過ぎてしまった。要望があり、次回は 2 時間に延長しての意見交換会を行うこととなった。

2 回目は市会や海外出張などさまざまな都合により、11 月 15 日(金)となった。まずは、各団体から近況報告を行い、現在取り組んでいる事業や来年度に向けて準備していること、現在抱えている課題について共有した。

はじめに、KFC からは笹川平和財団から助成を受けて実施している今年度の「届け！私たちの声！！ことばを紡ぐプロジェクト」事業の進捗について報告を行った。

神戸市からは、9 月に行った「留学生と考える共生社会の実現に向けた政策アイデアコンテスト」についての報告があった。次に、婦人懇談会や自治懇談会が行われたこと、そのなかで以前は生活ルールが守られないという話が多かったが、地域の外国人住民と交流したい、顔の見える関係をつくりたいという声が聞かれたとの話があった。

KICC からは、秋は多文化なイベントや国際的なイベントが複数開催されることや、日本語学習などについて他都市での取り組みを調査する予定と、KICC のイベントの告知をどのようにして外国人住民に認知してもらうか、といった課題が話された。

続いて、KFC からは中国残留邦人帰国者である高齢者から、日本人との交流の機会がないという話があったという報告や日本語学校で起こっているさまざまな人権に関わる懸念事項についての報告を行い、日本語学校へのコンプライアンス指導の必要性を話した。

続いて、昨年度の提言の「①出会いと繋がり創出」について、率直に課題を共有した。地域の高齢者と急増する外国人の若者が生活時間の違いや外国人留学生や実習生の多忙さなどから交流にハードルがあることが話された。また食糧支援には多くの外国人が集まるが、食糧支援と交流会をセットにしたイベントには人が集まらなかったという報告もあり、学校とアルバイトの時間の合間に食料を受け取りに来る学生たちにとっては、交流会に参加する時間の余裕がないのではないかと感じた。

次に「(多文化)共生」にむけた事業案について、市政だよりを活用した神戸の魅力的な歴史の発信などさまざまなアイデアが出たが、時間になったため深めるところまでは至らず、今後に持ち越しとなった。

3 回目は、3 月に実施予定で、来年度も引き続き、意見交換会を定期的に実施し、外国人住民と日本人住民が共に安心して過ごせるようなアイデアにとどまらずに、共生に向けた事業が実現できればと考えている。

(志岐 良子)

2-3 合宿

(1) 合宿にかけた願い・不安

これまでの事業で見いだされた課題は、「行政、市民両者に働きかけられる人」の必要性である。「多文化共生」施策にもさまざまある。「多文化理解を深めるための」外国語(英語)事業、ルール周知の講座など日本人のための施策から、外国人住民のニーズから立ち上がった施策までを含む。ただ、外国人住民が評価する事業であっても「届いていない」。外国人住民側は、エスニックコミュニティ内の交流は活発だが行政機関との接点をもちづらい、情報の受信力が高くないなどの課題がある。もちろん、接近の難しさをつくっているのはマジョリティ側である。それでも双方がお互いを認識し、相手がどこにいるのかがわかれば、出会うことができる。その結果、「多文化共生」施策が本来意図している(と願いたい)共生社会の礎をつくることができる。以上の旨を、理事長は「平行関係にある施策と当事者の視線を少しずつ相手の方向に変えられる人が必要だ」と表現した。

この言葉を聞いた時、曖昧な理解にとどまっていた「セルフサポーター」の意味が腑に落ちた。ピアサポーターやアドボケートとは異なる役割をもち、共生社会の実現に必要な担い手。マイノリティのことも、マジョリティ側の実情も理解する。そのうえで、双方が少しずつ変化させられる領域を探り、出会う場を導ける人。KFC が思い描く人物像が浮かび上がった。

問題は、どうすればセルフサポーターを育成できるのかという点である。自らが設定した課題ではあるが、座学的な何かを学べば達成できる代物ではない。心の音叉が振動したとき(金迅野さんの本事業 2023 年度フォーラムでのお言葉)、音叉の反応に向き合い、望む方向に歩を進められるようにすること。これは知識の問題ではない。一人ひとりの音叉と行動力は、教えられて身につくものではない。

そこでふと思い浮かんだのが「当事者性」という言葉である。「当事者」の意味内容の拡散と、それが孕む危険性は承知した上で、あえて使わせてほしい。共生社会のあゆみを遅らせているのは、当事者性の希薄さではないか。当事者性とは、自分の生きづらさを認識すること、そして「社会の『当事者である』という意識と効力感(工藤・鴻上 2021)」を有していることである。

一握りの人を除けば、誰しものが生きづらさを抱えていると思う。例えば、2021 年の流行語大賞トップ 10 にランクインした「親ガチャ」にそれが表れているのではないか。戸谷(2024)は、「親ガチャ」は自己の出生を呪う言葉でも親を非難する甘えの言葉でもなく、苦境にある人への社会の無関心さへの挑発であり憤怒であると述べる。自分(や自分の親)の

力ではどうにもできないけれど、自分でなんとかしろと言う社会。どうにもできないのは、自己責任だと言われる。そのなかで強くあろうとするほど自己責任を内面化し、自分ではなんともできない状況に置かれていること、置かれている人がベールに隠されてしまう。それが「生きづらさ」という、責任の所在が不明慮な言葉に置き換えられ、自覚する機会が巧妙に奪われている。そして社会・夢への諦めのなかにとどめられる。マイノリティほど「諦め」のなかで生きることを強いられる。諦めさせられていることに無意識では気付いているけれど、言語化できない。言語化させてもらえない。何かを変えたいけれど、何をしたらいいかわからない。

そうした諦めや生きづらさが一人のものではない。私のせいでも、私の家族のせいでもない。だから、生きづらさに気付いたら、頑張って表現してみよう。そして、生きづらさを軽くするための方法を、セルフケアやメンタルケアを越えて、社会の問題として考えませんか。そうする力が私たちにはあるのだ、という効力感をもつことがここで言いたい当事者性である。それが心の音叉になり、行動の一步にもなるのではないか。

この過程を実現できれば、共生社会のモデル構築に一助となると考えた。相手の当事者性に心を寄せるためにも、まずは自分のしんどさから出発する。私もあなたと同じようにしんどい思いがある。だから、しんどさを変えるために一緒に何かをしましょう。私たちは何かができる存在だよ、ということを認識する過程が必要だと思った。だからこそ、このプロジェクトはよくある座学的な学びにとどまらず、自分たちが実際に行動するステップとしてフォーラムをセットで実施することにした。

以上を念頭に、合宿およびフォーラムプロジェクトを企画した。応募者は心配をよそに定員以上に集まってくれた。応募書類では、現在の問題意識、合宿で学びたいこと、合宿後に挑戦したいことなどを尋ねた。問題意識は多様で、女性、教育、就職の問題や共生における IT との関わりかたなどが挙げられた。応募した動機は、「子どもの頃から自分の意見を人前で言うことに苦戦しています。だからさまざまな経歴やバックグラウンドをもち備えている人と関わりたい」など、共生を考えることはもちろん、誰かと関わりたいという思いも散見された。合宿後には、「多文化共生の功罪をしっかりと理解し、客観的な根拠に基づいて説得力のある主張が出来るようになりたい」など、明確に何ができるようになりたいかを持っているメンバーが多かった。応募書類での応募者の声と、各回の参加者の感想も合宿の内容づくりに反映させたことを、合宿企画の遅滞の言い訳とさせていただきたい。(次に何をするかわからないとメンバーをワクワクさせ、心配をかけてしまったことは、ここでお詫びしたい。ごめんなさい。)

最大の難関は「応募者が最後まで続けてくれること」だった。1回目に来てくれた以上、それ以降続けたいと思うか、続けられない、やっても意味がない、と思わせてしまうかは、

主催者側の力量にかかっている。こちらが求めるものと参加者のニーズ、思いが合致しなければ一緒にゴールを迎えることはできない。毎回、ひやひやした集合時間は今でも思い出す。この点は、拙い企画運営に辛抱強く付き合ってくれたメンバーの寛大さ、それでも学びがあると信じ自分たちで学びや関係性を深めてくれたメンバーの力強さのお陰である。また、メンバーでもあり運営側でもあるという難しい立場であったインターンの曾祢さんが狭間に立って注力してくれたためである。

なお、初回合宿の前に顔合わせとしてオンライン打合せを行った。だが、日程が調整できず数回に分けて実施したため、全員での初めての顔合わせは当日となった。

改善点ばかりでやり直しができたらと思うことがたくさんあるが、メンバーたちの学びの軌跡を残し、その声を届けること、そして「人を育てる」事業が陳腐な理論で否定されないように、「人を育てる」事業の重要性を伝える一助になることを期待し、合宿内容をまとめる。

(櫻木 晴日)

戸谷洋志 2024 「『親ガチャ』と自己責任論」現代思想 52-5.

工藤勇一、鴻上尚史 2021 『学校ってなんだ！』講談社現代新書.



第3回合宿 書道ワークで描いた絵(はるひ作)

「多文化共生」って何？ 当事者不在の共生？？
届け！私たちの声！！ 何じゃそりゃ？
ことばを紡ぐプロジェクト
 「多文化共生ってほんまにこのままでいいん？」
 そう思ってるあなたが主役のプロジェクトです！

対話をもとに共生を紐解く
4回の合宿で... 合宿研修 + フォーラム運営 (2025年2月頃)

新しい仲間と出会い、
 共生に対する自分たちの考えを一
 緒に言葉で表現してみませんか？

<募集対象>
 外国にルーツを持つ方、
 共生社会を願う日本在住の方
 (18歳~30代の方)

プログラム詳細
 お申し込み方法については
 裏面をご確認ください！！

12/20(金) ~12/22(日)(仮)
 まどめる
 13:00 - 17:00 (要予約)
 合宿全体での学びの
 まどめと、フォーラ
 ム運営の準備を
 しましょう！

9/14(土) ~9/16(祝月)
 深める
 13:00 - 17:00 (要予約)
 様々な素材を使って
 自分たちの思いをど
 う表現していくか学
 んでいきましょう！

8/24(土) ~8/25(日)
 13:00 - 17:00 (要予約)
 専門家の話を聞いたり、
 デイスカッションによる
 グループワークを予定し
 ています！

6/29(土) ~6/30(日)
 13:00 - 17:00 (要予約)
出会う
 まずは新しい仲間との
 親交を深めましょう！
 昼食はバーベキューを
 予定しています！！

フォーラムでは...
 行政関係者や共生社会分野
 における研究者などをお招
 きします。合宿を通して、
 私たちの声を届ける準備を
 しましょう！！

↑2024年2月
 開催した「多文化共生フォーラム」の様子

・宿泊費
 ・食費
 ・交通費

そもそもどうして合宿を??

みなさんは「多文化共生」という言葉を聞いて、どのような社会を思い浮かべますか？

現在の多文化共生施策は皆さんの考える共生像を実現するのに十分なのでしょうか？
 外国にルーツを持つ住民の声が反映される場所は十分にあるのでしょうか？

「多文化共生」事業の多くは、国際交流協会や行政機関主導のもとで進められますが、そこに勤める外国にルーツを持つ職員は非常に少ないのが現状です。神戸定住外国人支援センター（KFC）が2023年度に行った調査では、他者を巻き込みながら能動的に活動する人、また行政機関と外国にルーツを持つ市民の架け橋となり、当事者の声を届ける人の必要性が課題として挙げられました。

なかなか自分たちの声が反映されない今の日本社会で、温かいとした違和感や生きづらさ、不公平感をもつ当事者が多いという現状もあります。

そこで、本プロジェクトでは、「多文化共生」分野におけるセルフサポーター（共生社会の実現に向けて能動的にコミットする人）育成プログラムを行います。プログラム内容は計4回（1泊2日×2、2泊3日×2）の合宿と2025年2月のフォーラム運営です。プログラム詳細については、以下をご覧ください。

<プログラム詳細>

募集対象：今の日本社会で違和感とした生きづらさ（不安や違和感）を持つ外国にルーツを持つ方と、共生社会を願う日本在住の方（18歳以上）

募集人数：10名程度（応募者多数の場合は、申し込みの順にご記入いただく応募動機を参考に選考を行います。）

応募方法：右下のGoogle フォームQRコードからお申し込みください。

参加費：無料（合宿の宿泊費、食費、プログラム参加にかかる交通費はこらで負担いたします。*遠方から参加される方は要相談）

宿泊場所：しあわせの村（まだ全日曜の宿泊所が確定していないため、宿泊場所については参加決定後に連絡させていただきます。）

お問い合わせ先：お申し込みはこらまで ☎: tsumugokotoba.tsumugokoyase@gmail.com (↑プロジェクト担当E-mailアドレス)

※調査初年度（2022年度）の報告書

KFCとは？
 神戸定住外国人支援センター（KFC）は、1995年の神戸開港150周年記念事業として、それまで行われていた個別外国人支援を踏まえ、定住外国人（移民）支援を目的に1997年に設立されました。KFCは、多文化や文化の違いに関わらず多様な価値観を尊重し、日本に住む全ての人の「人としての権利」が守られる社会を目指して、多くの方々の協力を得ながら活動しています。

主催/NPO法人神戸定住外国人支援センター（KFC）
 TEL: 078-612-3402 FAX: 078-612-3052
 神戸定住外国人支援センター E-mail: kfc@kfc-kobe.jp
 〒655-0055 神戸市東灘区高島町4-4-10 アスタクエスタ北灘502

「ことばを紡ぐプロジェクト」メンバー募集チラシ(左：表面、右：裏面)

★メンバー紹介★

曾祢 メラティ(メラティ)：インドネシアと日本にルーツを持っている。春から KFC でプロジェクトのインターンをしている。いちメンバーとしても活動をしている。

野津 貴哉(たかや)：帰国子女で約 12 年前に帰国した。小・中・高は日本の公立学校を卒業。今は大学で国際政治を専攻している。

オキーレ 賛(たすく)：母親は日本人で父親がガーナ出身。日本で生まれ育った。現在は科目等履修生で、英語科の教員免許の取得を目指している。(メンバーとしては、第 4 回から参加)

清水 フェリペ 隆志(フェリペ・ペ)：大学 3 年生。親がブラジル人。日本生まれ日本育ち。教育学部所属で、教員採用試験を受ける予定。小学校の先生を目指している。

塚本 南帆(なほ)：「多文化共生」に興味をもち、外国にルーツを持つ人の学習支援や外国人相談のボランティアに携わってきた。

サラウディン 柳 愛紗(アイシャ)：母が日本人で、父がバングラデシュ人。自身を「ハーフ」と呼称している。生まれは日本、育ちはバングラデシュ、大学は日本。今は社会人でグローバル人材の就職支援をしている。

下村 向日葵(ひま)：京都の大学に通う 4 年生。神戸の素晴らしい活動を勉強し、それでも足りない部分があることに驚いている。

塩田 妙子(たえ)：日本と外国にルーツを持つハーフ。海外に住んでいた年数が長く、現在は社会人として日本で生活している。



左からたすく、メラティ、なほ、アイシャ、たかや、ひま、フェリペ、たえ

(2)第1回合宿「出会う」

日時: 2024年6月29日～30日

場所: しあわせの村 および 長田区文化センター

目標: ・漠然とした不安や不公平感、置かれた状況を知覚する。

・現在の共生社会のあり方に疑問を持つ若者が当事者性を認識する。

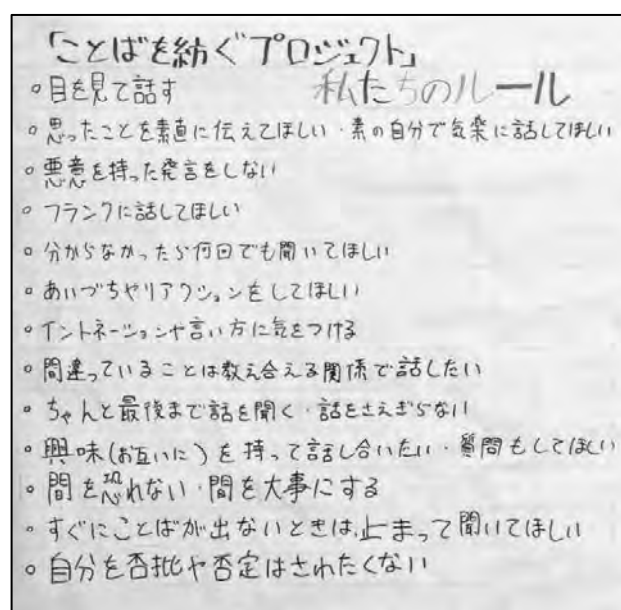
・メンバー全体でボーダーのない仲間づくり、連帯を創りあげる。

・対話を通して得た気付きの言語化と発信力の強化。

ワーク①「セーフティな場になるためには?ルールづくり」

対話を大事にしたいことを共有する時間を設けた。一人ひとりが好きな色の毛糸をもちコミュニティボールをつくりながら、希望する呼び方を伝えあった。その後、対話をする上で「これがあったら安心できる」ということを発表した。まとめたものが、右の『ことばを紡ぐプロジェクト』私たちのルール」である。

また、参加メンバーには KFC 作成の参加規約承認書に署名してもらった。全てのハラスメント、個人情報や発言内容の同意のない漏洩を禁止する内容であった。ルールブックも配付した。

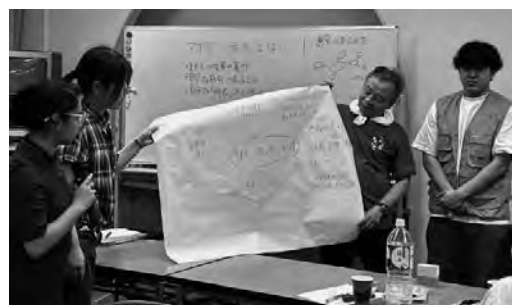


ワーク②「人生年表」

「多文化共生」を考えるきっかけや社会に違和感を持った原因など、自分の考えと経験を知覚化することを目的に行った。これまでの人生での出来事、その時の感情、その原因などを書きこみ輪になって共有した。

ワーク③「自分を知る・アイデンティティの認識」

自分を表す言葉を書き出し、自分と異なるアイデンティティを持つ人にどう接してきたのか、自分にとってのアイデンティティとは何かについて個人で考えたあと、グループで話し合い模造紙にまとめた。



ワーク④「他者を知る、『多文化共生』について考える」

「自分らしく生きていくために何を望みますか」、「目指す社会/理想とする社会はどんな社会ですか。」という問いについて個々で考え共有した。個々の考えや個人のあゆみを振り返った次の段階として、どのような社会を目指したいか目標を共有する時間になることを目指した。

ワーク⑤「コリアンパーカッションのワークショップ」

「スタジオ・長田教坊」からパクウォンさんに来ていただいた。初対面のメンバーたちが「息を合わせる」経験をした。多様な表現の一つを学ぶことも目的とした。

★いま、第1回合宿を振り返って-塩田 妙子-★

第一回目の合宿では、神戸市の山奥にある「しあわせの村」で共生スポーツパーソンとなる皆さんと初めて出会った。



初めての出会いがたくさんある中、シャイな自分は戸惑いもした。さらに、自分のアイデンティティや経験をはじめとする個人的で感情的な内容について合宿で話すと知った。そこで、自分の気持ちや伝えたいことが十分に伝わる自信はあまりなかった。しかし、自然に囲まれた私たちは自己紹介するなかで話し始めた。さらに、共感できる者や自分とは全く違う経験をしてきた者と対話する貴重な機会だとすぐに感じた。対話を続けながら皆さんと一緒にバーベキューの準備を進め、賑やかな食事をした。

合宿の初日に自分が感じた違和感は、皆さんと交流する事で溶けた。加えて、KFCの者の温かいガイダンスや共生スポーツパーソンの皆さんの明るさで心強さを感じた。グループディスカッション時のルールを決める事やリスペクトを持って対話をする事を皆さんと決めた。これが居場所づくりの一步になったと感じた。さらに、ここなら仲間ができるのではないかと感じさせられた。気持ちよく対話できる場所を築くことで、自分のアイデンティティについて考えたあとに学んだ内容(在日韓国人の歴史や外国人相談窓口の役割)についての議論がしやすくなり、よりよいディスカッションができたと感じる。一回めの合宿はその後の学びの土台となり、仲間意識や居場所づくりに大事な一步となった。

(3) 第 2 回 合 宿 「 学 ぶ 」

日時: 2024 年 8 月 24 日 ~ 25 日

場所: 神戸セミナーハウス

目標: ・ 外国人「問題」が つくり出されてきた 構造的 背景を 理解する。

・ 制度と現場の視点から、各層で異なる非共生の状況を立体的に理解する。

・ 現場での活動内容と、活躍までの経緯を知る。

→ 自らの課題意識の明確化と、何をすべきなのかを考える一歩とする。

ワーク①「挨拶・アイスブレイク・講義準備」

第 1 回合宿から少し時間が空いたため、身体を動かすレクリエーションを行った。あまり言葉を使わなくても楽しめる、ゲームを行った。久しぶりの対面だったが、ほぐれた表情を見せてくれた。



スイカ割り

ワーク②講義「外国人『問題』はどうつくられてきたのか？」

「外国人」や「国民・市民」は恣意的な概念であり、日本ではどう構築されてきたのか、在日コリアンをめぐる制度や市民運動の歴史などについて伺った。

ワーク③「講師との質疑応答・意見交流」

講義を聞いて考えたこと、疑問、感想などを共有した。疑いをもたずに使っていた「外国人」という言葉への疑問、無意識のうちに「日本人らしさ」が刷り込まれ教育課程がいかに「日本人らしさ」を身に着けているかどうかの選別装置になっているなどの意見が交わされた。



ワーク④「社会とのかかわりから『生きづらさ』を見直す」

「共生」に関して「生きづらさ」や違和感を感じたこと、そのときの気持ち、違和感の原因とそれを変えるために必要だと思うことについて個人で考え、1対1で共有しあった。なお、このワークで考えたことをもとに第3回合宿までに「生きづらさや違和感をなくし、だれもが居心地がいいと思える『多文化共生』社会をつくるためには」のテーマで作文を書いてもらった。

ワーク⑤パネルディスカッション「分野を横断した現場の話から共生にむけた課題を知り変化の方法を考える」

大人・子ども、行政・民間・地域、などいろんな点で異なる側面を持つ場で活躍されている方々に来ていただいた。まずはそれぞれの活動内容をお話しいただき、ファシリテーターの今井さんに重要なポイントや視点など共有いただいた。

ファシリテーター：今井貴代子さん(大阪大学人間科学研究科講師)

パネラー：村松紀子さん(元(公財)兵庫県国際交流協会スペイン語通訳相談員)

村西優季さん(NGO 神戸外国人救援ネットスタッフ)

原めぐみさん(Minami こども教室代表)

鐘鴻琳さん(Minami こども教室ボランティア)



ワーク⑥「講師との意見交流」

それぞれの方のお話を受けて、気になったことなどを話し合った。仲間をどのようにしてくれるか、「かわいそうな人に与えてあげる」という平等どまりの発想を公正の実現に向けて変える必要性など、いまの支援現場の問題点とどうなる必要があるのかについて議論を深めた。

★いま、第2回合宿を振り返って-下村 向日葵-★

2回目合宿は、さまざまな専門家を集めディスカッションを行った場である。立命館大学の孫片田教授による在日コリアンと外国ルーツを持った人たちの歴史の講義では、一方的に国籍や名前を変える政策に翻弄される理不尽さを学ぶことができた。またその政策が未だ現在の政治の根底になっていることも学んだことで、より一層制度的差別の根深さを理解することができた。また、原めぐみさんと鐘鴻琳さんによる Minami



ども教室についてのお話は、日本に來たばかりのこどもたち、そしてお母さんお父さんの苦悩の最前線と一緒に立って戦う人たちの生の声であり、一言で多文化共生と言っても、さまざまな家庭の状況や言語レベル、悩みなどがあることに気付かせてくれるものだった。さらに、村西優季さんの NGO 神戸外国人救援ネットのお話は、震災をきっかけにできたという背景から、コロナなどのさまざまな社会状況や、特に外国人女性が直面するインターセクショナリティについて改めて実感するようなものであった。またビザの理不尽さにも改めて気付かされた。仮放免などの状態にある人たちは生活保護を申請できないなどの基本的人権さえ危うい日本の法律を知り、自分がいかに当たり前に日本国籍であることを享受し、その排他的なルールを理解できていなかったかを反省した。さらに、松村紀子さんの JICA 関西での活動のお話もまた、多文化共生の理想と現実を改めて私たちに突きつけた。多文化共生とは、インターナショナルな文化の入り混じる素晴らしいものであるように見えるのと同時に、その裏にあるビザや人権の問題を隠してしまうことに、彼女の支援員としての活動のお話から気付くことができた。今井貴代子さんのファシリテーションのもと、全員でのディスカッションで、自分のビザや在留資格への知識のなさを反省しながらも、ビザの制約に対してさまざまな知恵や支援を駆使して目の前の人たちを助けようとする姿に感動した。

多文化共生について考えるとき、私はどうしても根本的な問題のせいにしてしまうことばかりだ。しかし、当事者であったり、目の前にいる人を助けるという仕事をする人たちとの対話を通して、多文化共生とは現実問題どう言ったものなのかというものが具体的に理解でき、マクロだけではなくマイクロな視点からも問題を見つけることが、ただ政治に不満を垂らすだけでなく自らが能動的に居場所の生産者になることである、と体感することができた。

(4) 第3 回合宿「深める」

日時: 2024 年 9 月 14 日～16 日

場所: 多文化子ども共育センターMoi および しあわせの村

目標: ・「多文化共生」に問題意識を持つ同世代の人々との対話を通し、いまの社会の問題点や不足する社会資源についての理解を深める。

・「多文化共生」についての問題意識に対して、自分がどのようなアプローチをしたのかを考え、より実現可能な形にする方法を知る。

・1 月 18 日のフォーラムについて対話し、一定の骨組みをつくる。

ワーク①「思いを芸術で表現する」

自らの思いを伝える手段は言葉や文字だけではないことも学べたらという思いのもと、イラストレーターで書道作家の Wakkun さんにお越しいただいた。作家になられた理由や作品の背景にあるものなどをお話しいただき、実際に大きな紙に絵を描いた。



ワーク②「作文のシェア・意見交流」

宿題として事前に提出してもらった作文を読み合って、意見を交流した。初めて聞いたメンバーの社会活動、それぞれの問題意識の明確化、目指す社会像として「multiculturalism」と「interculturalism」の違いなど、文字化された情報から気になった言葉を抜き出してこれまでの対話を深める機会になった。

ワーク③「多文化共生施策の立案から実現まで」

地域の「多文化共生」を進める神戸市地域協働局地域協働課課長中村歌奈子さんに、神戸市の取り組みや新しく開始した仕組みについてお話をいただいた。市民が一度は必ず利用する行政窓口でのサポートが不可欠だと、情報発信に力を入れておられることなどを伺った。

ワーク④「今の社会、私たちに必要な社会資源」

ゲストとして来ていただいた3名に、これまでの生活の歴史や社会の課題と感ずること、あるべき社会資源などについてお話を伺った。「当事者」とされる人をめぐる非対称な関係性がさらに明示される時間になった。

講師：ラボルテ雅樹さん

TRAN HUY HIEU さん

オキーレ賛さん



ワーク⑤「フォーラムに向けて」

フォーラム開催に向けて初めて話し合いの時間を設けた。テーマのみが与えられるメンバーに委ねられたフォーラム企画運営で、目的や対象を決めるなど一からのアイデア出しであった。最初は苦戦していたが、キーワードが抽出されるなど、ここから少しずつあゆみ始めた。

ワーク⑥「思いを実現するための企画の立て方」

助成金の委託・受託どちらのご経験もある森さんを講師に招き、企画立案までの道筋についてお話をいただいた。具体的に企画書の最初のステップを書いてみるというワークショップも取り入れていただいた。事前にメンバーの作文を読んでもらったり、それぞれの関心ごとをピックアップし活動に落とし込むアドバイスをいただいた。

ワーク⑦「フォーラムに向けて」

ワーク⑥を受けて、背景や目的を明確化しながらフォーラム企画のためのアイデアを出し合う。共通の単語でも、それぞれが持つ問題意識には微妙なずれがあり、そのすり合わせにも苦心していた。



★ことばを紡ぐプロジェクト-清水 フェリペ 隆志-★

第三回の合宿では出会いと学びがあった回であった。特にひゅうさん(ワーク④講師)との出会いは私にとって、とても大きな転機となった。ひゅうさんは私の通っている大学の卒業生であり、先輩にあたる。さらに自分と同じように外国にルーツを持ち、小学校教員をしている。僕目指すべきところがより明確になった回もあった。しかし、ルーツを持ったうえでの教員はとても苦勞していることが話からわかった。ひゅうさんは自分の外国ルーツを捨てようとしていた。日本人を観察して日本人になろうとしていた。決して悪いことではない。私もそうなるようとしていた。ここは日本だからこそ、自分のルーツは特に必要ではないと考えていた。しかしこの考えはひゅうさんのある言葉で大きく変わった。「じぶんとは何か、なぜ日本に居るのか。」この合宿に参加するまで、自分という人間を見つけられなかった部分がある。(ブラジル人の清水フェリペ隆志)この肩書でしか語れていなかった。ルーツがあるから子どもたちが理解できるわけではない。ルーツがあるのはわかったうえで、どのような背景があり、どのような人なのかを知っていく必要があるとはじめ気付くことが出来た。さらに、私の目指すべき教師像の一つになった。ここで上げた問いの答えはどれだけ時間をかけても見つからないと思う。しかし、これから先、教師になり、答となる手がかりを見つけ続けることが外国ルーツを持つ人間としての大きな進歩となる。まだまだ未熟な人間だが、多文化共生の言葉を変える一步を踏み出したいと考える。



★いま、第3回合宿を振り返って-塚本 南帆-

私が第3回合宿で印象深かったことは、移民二世を取り巻く環境や心の葛藤を聞いたことである。今まで、友人や日本語学習支援で外国にルーツを持つ二世の人と接してきたが、3回合宿では初めて彼らが抱える生の声を深く聞けるととてもよい機会になった。特に、2世が考える、日本人より日本人になりたいという同化の気持ち、日本語が分かるのに外見が「日本人」でないため丁寧に説明されるという話はとても心に残っている。このような同化や違和感を、外国にルーツを持つ子どもたちは、幼い頃から抱いているのではないかと思った。このような子どもたちも居ると知れたことで、彼らの発言や行動にもっと気をつかいたいと思ったし、私自身彼らのその思いを話せる存在になりたいと思った。さらに、日本にはまだ移民労働者の人権を守れていない会社がある現状を聞いたことも印象に残っている。このことを合宿メンバーから聞き、自分の身近な人も経験していることがとても身に染みた。そこから、自分の共生に対する怒りや不満を、みんなの前で話すことができた。そして、自分自身が普段感じていた、共生が進んでいないが故に感じるモヤモヤ違和感を口にし、考えを明確にすることができた。

(5) 第 4 回 合 宿 「 ま と め る 」

日時: 2024 年 12 月 20 日 ~ 22 日

場所: 中央区文化センター および しあわせの村

目標: ・ フォーラム開催に向けて、能動的に企画・運営に取り組む。

- ・ 合宿を通して得た学び・気づき・意識の変化を整理し、「多文化共生」における自身の問題意識を他者に伝える。
- ・ メンバーで協力し、フォーラム開催のための最終調整を行う。
- ・ 文字を通して思いや考えを伝える方法・その意義について学ぶ。
- ・ 合宿後の展望(今後の社会との関わり方)と、行動の一步を考える。

ワーク①「成果報告会」→次項

ワーク②「個人成果報告会を経ての感想共有」

フォーラムに向けて、個人の言葉を受けてメンバーそれぞれが何を考えたのかをシェアする時間を設けた。発表を聞いて得た新たな発見や、印象に残ったこと、自分と同じことを考えていたと共感したことに分けて、付箋で書きだした。



ワーク③「フォーラム準備」

ワーク②を踏まえ、フォーラムで具体的に何を伝えたいのか、事前ミーティングで決めた大枠と照らし合わせながら考える。大筋に何をいれるのか、白板上で付箋を何度も張り直しながら、どこで何を伝えるのかを議論していた。



ワーク④「報告書作成に向けて」

本事業の初期から携わってくださっている加藤丈太郎さんを講師に招き、文章の書き方を教えてもらう。報告書を書く意味から、読みやすい文章の書き方までご講義いただく。実際に文章を書いて、グループごとに読み合った。「ピアレビュー」の重要性を実感した時間になった。

ワーク⑤「フォーラム準備」

前日に決めた流れをもとに、担当を決めた。一度概要をつくり通しで発表する。その後、保留になっていた「多文化共生」の使い方や自分たちのスタンス、およびキーワードとしてでてきた「居場所」の定義について話し合いをした。

ワーク⑥「合宿最終日を迎えて振り返りと合宿後の展望」および「フォーラム準備」

合宿のまとめとして、自分たちの問題意識を振り替えるとともに、その解決のためにはどこに働きかける必要があるのかについて、ミクロ、メゾ、マクロの視点で意見を出し合った。



第3回合宿 書道ワークでの絵(ひま作)

★いま、第4回合宿を振り返って-サラウディン 柳 愛紗-★

報告会では「居場所」や「多文化共生」という言葉について、さまざまな考えが共有された。それぞれの参加者が異なる視点を持ち、共生の捉え方にも違いがあることを改めて認識した。



第4回合宿はフォーラム前の最後の合宿であり、フォーラムに向けた準備を進める重要な機会となった。私自身、新しい言葉として「マイクロアグレッション」を知った。これまで自分がその対象となっていたことに気付くと同時に、自分自身も無意識のうちに他者に対して行っていた可能性があることを認識した。

合宿では、アイスブレイカーとして「私に関する10の文」を書くワークを行った。初回の合宿でも似たようなワークを行ったが、改めて自己と向き合う機会となった。このワークを通じて、参加者が自身の価値観を振り返ると同時に、他者との共通点や違いを認識することができた。

報告書を作成する際、読み手の視点を考慮し、初めから冷静に自分が伝えたいことを整理することを心掛けた。ほかの人にとって理解しづらい言葉が含まれる可能性があるため、必要に応じて補足説明を加えた。これは、共生社会においても重要な視点であり、多様な背景を持つ人々が互いを理解しやすくするための工夫となる。

フォーラムに向けた準備として、付箋を使ったワークショップを実施した。テーマごとにグループ分けを行い、フォーラムで最も伝えたいことを明確にする作業を行った。このプロセスを通じて、共生に関する重要なメッセージを整理し、どのように効果的に伝えるかを議論した。

最終日は今後の展望として、「マクロ」や「ミクロ」の視点から、それぞれがどのように共生に貢献できるかを考えた。また、行政を巻き込んでどのような取り組みができるかについても議論を深めた。

(6) 成果報告会

日時：2024年12月20日 13:30-17:00

場所：中央区文化センター

内容：・個人発表(15分+質疑応答5分)8名。

- ・合宿前の共生に関する問題意識
- ・合宿に参加した理由
- ・合宿で得た学びと今後の見通し分

(以下は、各発表からの抜き出し。小タイトルは編集にて追加。)



成果報告会チラシ

①たえ

【社会を変えるには】

日々の生活のなかで苦勞している、しほりからちょっとはずれた人やグループも存在していることを多くの人に知ってほしい。日本だけではなくてどの国でも、アウトリーにされた人の対応や扱いはまだまだよくない。その一方で、私は自分が怒って自分が考えてそれで満足してしまっている。言いづらさプラス自分が言って何が変わる?と思いがちだった。前はしょうがないな、私にはあまり関係ないなと思っていた。社会の問題解決に踏み出せる可能性はこういう場にあると思います。私が何かを言うことで損はしないし、一つのアクションから色んな違うアクションが起こるかもしれないから、「もうやっちゃおう!」って。ほかにアクションしたいっていう人に囲まれてこういう話をする場所が大事。

【まずは自分を変える】

...最後に、日本社会をよりよい方向に変えたいっていう気持ちはみんな強いんですけど、自分にできることをできるときにやる。ほかの人の考え方を変えたいですけど自分の考え方も変えて、これから行動していきたいと思っている。

②たかや

【在日コリアンの歴史を知ること】

高校で差別が取り上げられるときはだいたいアメリカの公民権運動。海外のマニアクな活動家を知っているのに、日本でマイノリティの権利のために戦った人の話は一度も出

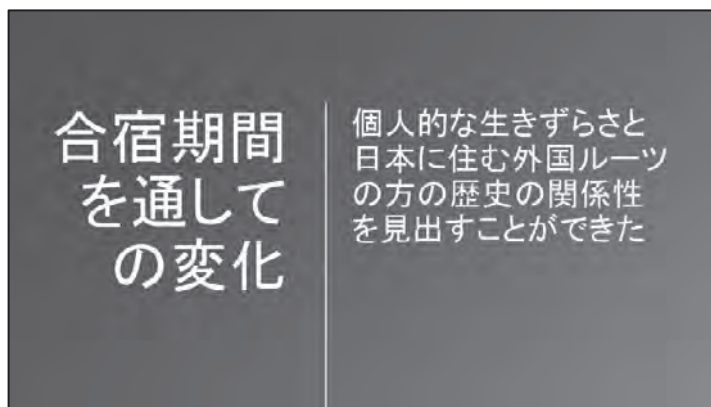
てこなかった。日本にも外国ルーツの人が昔からいて、権利向上をしてきた歴史があると知って、自分は一人ではないと知った。歴史の流れのなかにおいて、僕は勇気づけられた。

【差別は減った?】

露骨な差別は減っている。だが、企業が共生を語るのは、多様性を入れることによって得られる独創性や二次的なメリット。共生の本当の目的は同じ人間としてどう接するかということ。自分では選べないことで不当な扱いを受けていることが間違っている。それを是正することに価値がある。共生したら日本が復活するという観点は違う。

【恐怖をどう対処するか】

知らないことに出会ったとき、最初は緊張する。緊張は誰にもあるけど、緊張したことをどう捉えるのか。差別にエスカレートさせるか、相手を理解しようと努力するのか。それぞれがどう行動するかを判断できるようになるべきだと思う。



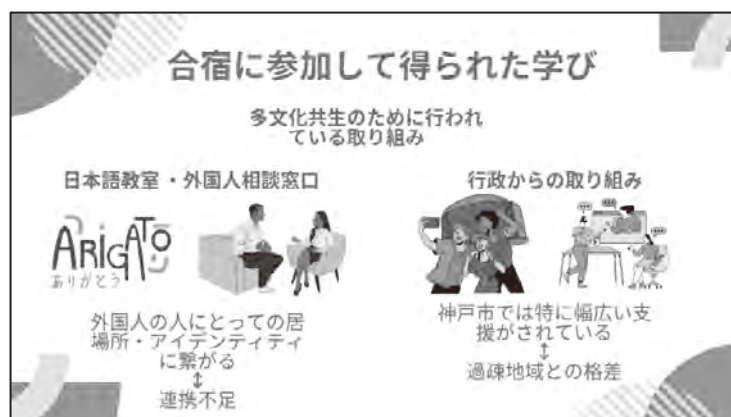
③なほ

【出会いと対話】

この合宿に参加すれば、自分と同世代で多文化共生にフォーカスしたい人たちと交流できると思い参加した。この合宿でよかったのは対話。発言に対して、みんなうなずいてくれる。反対の意見を持っていたとしても受け入れる気持ちをみんなが持っているから、安心して話せた。大学でもいろんな人とつながり、もっと話していきたい。

【芸術の意義】

墨絵や朝鮮の伝統的な楽器演奏で、言葉を発さなくても心を通してつながりあえた。芸術でお互いが一つになれる時間がすごくよかった。小学生の頃、ベトナムの伝統的なおもちゃや楽器、ムーランも毎年のように見ている。リズムや踊りを今でも覚えている。言葉じゃなくて音楽などでつながりあえる場がもっとあったらいい。



【すぐに相談できる場を】

問題だと感じているのは、連携不足。連携できれば、一つの問題でも人的ネットワークですぐに解決できる。在留外国人が多い地域は相談窓口も発展しているが、田舎などはまだまだ足りていない。これからは在留外国人も、それ以外の人にとって安心できる場所をつくりたい。

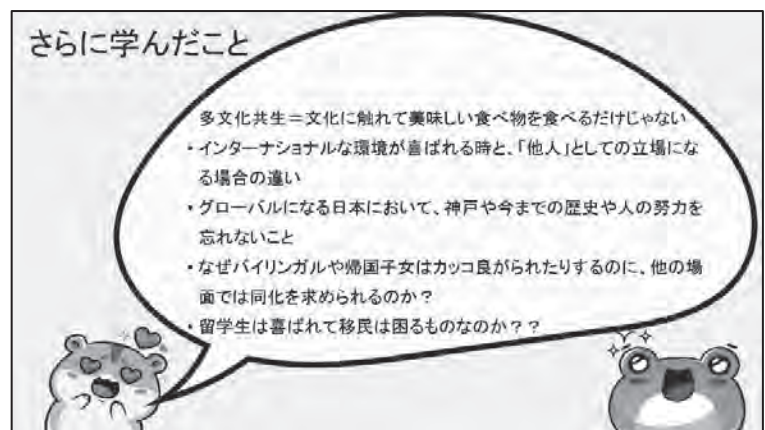
④ひま

【他者の生きづらさと出会うこと】

自分のつらかったことや、生きづらさを話してくれた。過去のことを話してくれるありがたさに気付いていなかった。その人のことを知っていたら何かが変わるわけではないが、知っておくことで変えられることがあると感じた。失礼なことを聞いてしまうかもしれないから、知らない方がいいと考える人が周りには多い。チャンスがあるときに生きづらさを話してくれる場面で現実で向き合う。想像力が大事。

【誰が変えるのか?】

行政の方は、経済の心配、レイバーホースとして見るしかない部分もある。仕事でやらないといけないことと自分の思いが矛盾している人もいるのではないかな。そういうところに目を向けないといけない。海外にルーツを持つ方が訴え続けるような共生ではなくて、社会全体で担っていく。この合宿に参加して思ったこと。



⑤アイシャ

【自分の故郷はどこだと思いますか?】

私は、「今は両方」。自己紹介ではハーフですって言っている。ぱっと見、日本人でもないしバングラデシュ人の見た目でもない。故郷はどこなんだろう、と自分のなかでさまよっている。幼いころから、「日本語じょうずですね」、「鼻が高いですね」、「足が長いですね」とよく言われた。悪意があるわけではない。好意的な発言だと思うけど、自分では気になっていた、違和感があった。ほかの人は経験していないのになぜ私だけ?と孤独感、しんどい思いをした。

【共生する社会に向けて】

共生は一人ひとりの意識と行動から変わると信じて、意識するようになった。自分の経験を聞いてもらうことが大事。こういうイベントがなかったらメンバーがどういう経験をしてきたかわからない。個人的な野望は外国にルーツを持つ国会議員ができること。

私自身も孤独感を抱え居場所を探してきた。今も探している一人。だからこそ、誰もが生活しやすい居場所をつくる手伝いをしたい。

合宿で得た学び

- 多文化共生への問題があるというベースが同じでも、抱えている・きっかけはみんな違う
- 居心地の悪さや違和感から始まる
- 居場所を探したい
- 日本人の親を持っている人で、日本の文化に違和感を持っている
- 分からないから知らない、知らないから分からない

⑥フェリペ

【学校での違和感】

日本生まれ、日本育ち。周りには恵まれ特に大きな問題意識を持っていなかった。持っていなかったというより、わからなかった。強いて挙げるなら、**教育面で特別扱いされていたこと**。質問をすると、日本人であれば求める回答を端的に答えてくれるが、僕だとはじめから丁寧に説明される。なぜだろうと思った。**流ちょうに日本語を話せるのになんで？**と。

【教員になったら挑戦したいこと】

合宿に参加して、**自分自身が外国人であるという強い自覚**を持つようになった。自分とは違うルーツの人に出会い話すことで外国人としての視点を得た。今後は、外国人の多い自治体で教員をして、自分ができることを模索したい。**日本の学校という枠をとっぱらいたい**。日本語指導が必要な子どものための学習支援の場はあるが、やさしい日本語などを科目として取り上げる必要がある。大学との連携も重要。福祉の分野でも外国人に関する授業は自由科目になっている。人材育成の点で、**教育以外の分野でも多文化共生の視点は求められる**。

合宿期間を通しての変化

- 自分が外国人であるという強い自覚
- 外国ルーツの持った視点から教育における問題点
- 外国ルーツのある子どもたちに対する気持ち

⑦たすく

【自分が抑圧者になる可能性への気付き】

言葉の影響力と、差別偏見の普遍性に気付いた。「スポークスマン」という言葉を平然と使っていたが、講師の協力を仰ぐなかで、「共生スポークスパーソン」の方がいいのではとご指摘をいただいた。幼少期から見た目の違いをからかわれることが幾度とあり、言葉の重みは理解していたつもりだった。だが、**自分の経験について話す機会を多く積む内に、自分がしてきたこと、自分がしている差別や偏見に意識が向かなくなっていたのかな**と思う。

【傷つき合うことの先に】

関わることの重要性も感じた。「多文化共生」と聞くと、色んな肌の色の人がそれぞれの国の民族衣装を着て、手をつなぎながら地球を囲っているイメージがあると思う。違いはあるし、違いにこそ価値がある。**人間や地球人という言葉で、違いにフォーカスを当てないようにするのはどうなんだろう。違いを違いとして認識したうえで、適切な距離をとって関わりあうにはどうしたらいいんだろう。関わりあおうとすると傷つきあう。たいていマイノリティがマジョリティに傷つけられることが多い。このプロジェクトはしんどい。**でも、いやだな、やめたいと思わなかった。苦しい思いをしながらも関わりあうなかで、**新しい価値、意義のあるものを生み出せているのではないかという実感があ**ったからだと思う。関わりあいのなかで傷つきながらでしか、マイノリティにとってもマジョリティにとってもいいものは生まれないのではないか。

このプロジェクトを通じて気付いたこと

- 「ことば」の影響力と
差別・偏見の普遍性
- 関わり合いの重要性

⑧メラティ

【他者と共有できるということ】

小さい頃はアイデンティティについて考えることはなかったが、自分が受け入れられていないと感じる場面が増えた。そういうことを話すと、**真面目ぶっていると思われそう**で人に**話す機会がなかった**。メンバーと話することで同じ思いや熱意を持っている人がいるとわかった。声をかけたら話してくれる人はいるのかなと思った。

【マイノリティに考えさせる社会】

自分のルーツを語ると、普通の「日本人」には聞かないプライベートな質問をされてはじめはいやだったが、途中から「同じ質問がきた、答えればいいんでしょ」と答える自分

がいた。それを続ける自分に変化を起こしたかった。踏み込んだ質問が面倒くさいのか、ルーツに誇りや自信を持てていないのか、興味がないのか?色々考えて、自分についてもっと知れたらいいなと思った。

【「自分らしさ」の否定】

昔は外国人っぽくしないといけないのかな、母語ではない英語を頑張らないといけないのかな、など考えていた。でも、自分は自分で、日本人でも外国人でもない狭間にいる状態でもいい。人によって違う。生きづらさや違和感を考えることは重要でそれが社会を変えることにもつながる。それをほっとかずに考えることが大切だと感じた。

インターンという立場を通して...

- ◆事業の企画から実施の流れや協力いただく研究者・活動家の方々との繋がりがつくり等、大学では経験できない実践的な学びを得ることができた
- ◆手探りの準備ではあったが、合宿プログラムでは「感覚」として発見や学びが残りやすいワークを入れるように意識した → 印象深い記憶として今でも心の中に残っている
- ◆意見をまとめたり、進行するという立場も担ってきた中で、普段より一層自分の考えを深めることができた。メンバーの想いや考えを積極的に理解しようとしたのはとてもよかった
- ◆メンバー兼インターンという立場に立つ中で、より対等な関係でメンバーと接することができたこと。メンバーの意見を取り入れやすかったこと、KFCで話し合った目的を理解したうえで参加し対話をリードできたことは、深くまで議論したり、メンバーの率直な意見を引き出すのに良い影響を及ぼせたのではないかなと思う



成果報告会後の懇親会終わり際に撮影